

古代から近世までの製筆技術

久保井宏和

毛筆が中国大陸において初めて造られ、それが日本に伝わってきたということは事実であろう。しかしいつ日本に伝わり、いつからその製造が始まるのかということは、今日においても未だに確固とした定説がない。

わが国での筆の製造が、弘法大師より始まるというのは今日でも行われている一つの説である。しかしこれが誤りであることは早くに指摘されていることである。

安彦勘吾氏は『奈良の筆と墨』のなかで次のように述べている。漢字がわが国に伝来したのは『記紀』によると、応神天皇のときというから、五世紀のはじめとなる。ところが、わが国と中国との交渉は、このときよりも早いとされている。渡来人にともなって、筆は日本に入ってきたと想定される。

漢字が伝来したのは、周知のように応神天皇の十五年である。漢字の伝来とともに筆記具としての筆が、中国ないし朝鮮半島から伝わったとみることは可能であろう。

今日において、なお巻筆の技術を伝えている藤野家に、京都の筆匠梅宗園の増井惣輔が記した『梅宗園手録』の写本が残っている。この『梅宗園手録』に、「人王十六代應神天皇十六年己二月始テ筆製」という記述がある。

応神天皇は『記紀』をもとにすれば十五代目でありこの記述の信頼性がどこまでのものであるかという問題はあるものの、漢字が伝来し

たところに筆が伝わったとする安彦氏の説を裏付けるものとして考えてもよいのではなからうか。

『正倉院棚別目録』によれば、正倉院に十九本の筆が伝えられている。わが国に現存する最古の筆である。これらは「みな短い毫(毛)を紙で巻き込んで、円錐形にまとめた雀頭筆と呼ばれるものである。ここから奈良時代の筆が巻筆であったことがうかがえる。ただこの巻筆は、雀頭筆と呼ばれていることからわかるように穂首の部分が極めて短いものである。

次に、平安時代になって弘法大師が嵯峨天皇に献上した上表文を次に見てみたい。

筆を奉献する表

狸毛の筆四管、真書一、行書一、草書一、写書一、右、伏して昨日の進上を奉って、且つ筆生坂名井清川をして造り得て奉進せしむ。

空海、海西に於て聴き見し所、此の如し。其の中に大小、長短、強柔、齊尖なる者は、字勢の危細に随つて惣て取捨するのみ。毛を簡ぶの法、紙を纏ふの要、墨を染めて藏め用ふること、並びに皆伝へ授け訖んぬ。空海自家にして試みに新作の者を見るに、唐家に減らず但恐らくは星の好み各別にして聖愛に允はざることを。自外八分小書の様、脚書臨書の式、未だ作ることを見ずと雖も、口授を具足することを得たり。謹んで清川に附して奉進す。不宣。謹んで進る。

弘仁三年六月七日

沙門 空海 進る

巻筆というのは芯毛の腰を強靱な紙で巻き締め、衣毛を着せてそれを何度か繰り返すという方法で穂首の部分を作るのであるが、ここに

